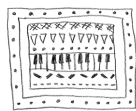


## 摂津市・市民講座「歌われなくなった 童謡・唱歌はどこへいった？」

(摂津市鳥飼東公民館)



毎月一回、6か月の講座。紹介された歌は28曲に及ぶ。歌の成り立ちなどを講師が話した後、参加者全員で歌うのである。もちろん、音痴な私は歌わない。昔歌った童謡・唱歌はほとんど教科書から消えて行った。軍国主義の色彩の強いもの(「われは海の子」)、文語調のもの(「早春賦」)、時代に合わないもの(「村の鍛冶屋」)、子供が歌いにくいもの(「からたちの花」)などである。昭和30年代生まれの私と妻は「二宮金次郎」「電車ごっこ」「箱根八里」は習ったことがない。平成生まれの子になると知るのは8曲のみ。指導要領の改訂が行われ音楽の歌唱教材は変わる。また教師により自主的に歌が選ばれていく。私が小学校の卒業式に歌った歌は「蛍の光」であるが、子は松山千春の「です。」を斉唱した。子は思い出さず口ずさんでいた。私は蛍の光を口ずさまない。講師は受け継がれてきた歌が教科書で扱われないのは文化の喪失というが、若い人たちはどう思うだろう。歌われる童謡・唱歌は変わっていく。短歌はどうだろうか。

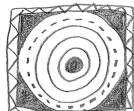
(桑原 博)

## 能『通小町』(観阿弥作・世阿弥改作)

宝生流・観世流・和泉流 三流合同第三十五回記念能楽鑑賞大会

(2022・9・18 富山県高岡文化ホール)

シテ・金井雄資 ツレ・金井賢郎



能は難しい、退屈だと思ふ人もいるかもしれませんが、舞台を観れば必ず「よいもの」とわかります。昨年、高岡市で行われた能楽公演に友人を誘って出かけました。

『通小町』は典型的な煩惱の物語。小野小町のもとへ百夜通いをして思いを遂げられず憤死したあの深草少将が主人公(シテ)である。見どころは何といってもシテの登場場面。橋掛かりから巖かに深草少将の亡霊が現れ、ぞつとするような地の底から響くような声で謡う。そこには恨みややりきれなさ、煩惱というものが凝縮されている。シテの動きは抑制された(序)から(破)、(急)へ展開し、一瞬も目が離せない。シテは恨みを表出しながら舞い、ワキの僧が弔いをするのだが、不思議なことにそうこうするうちに少将の煩惱や恨みがまるで霧が晴れたように浄化されていく。そして最後の止め拍子を踏むと、何事もなかったようにまた橋掛かりを通って彼岸へと帰っていく。観能後は、精神が浄化され、サウナ以上のデトックス効果が得られます。皆様もぜひ。

(山下佐保)